
シスター！

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シスター！

【Nコード】

N4752S

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

絶世の美姫と名高いグリーンヒル伯爵家の末の令嬢が修道院に駆けこんだ。彼女に恋い焦がれる若者たちが悲嘆に暮れるなか、とある見習い修道女はとんでもない秘密に頭を抱えていた……。女子修道院でくり広げられる、いろいろおかしい青春ラブコメディ。【不定期更新】

デイツセルヘルム公国で、グリーンヒル伯爵家の令嬢を知らぬ者はいない。

現当主の伯爵には四人の娘がいる。いずれも美姫と名高い伯爵夫人の血を色濃く受け継ぎ、社交界の薔薇と称えられる見目麗しい乙女だった。特に長女のマリアーヌは、とある貴族が催した仮面舞踏会にお忍びで参加されていた大公殿下とそうとは知らずに恋に落ち、のちに大公妃として見初められるというおとぎ話のような逸話で有名だ。

次女のイリシャは フアルスの霜剣 と謳われる騎士の名家・エーデル伯爵家に嫁ぎ、三女のヴィアンカは宰相の孫で国立大学の教授を務める若き博士との婚約が決まっている。伯爵家の繁栄を謳うような縁談をだれもが羨み、そして人々の関心は、ひとり残った末娘をいったい何処いずこの貴公子が射止めるのかということだった。

四女のフレデリケは十五歳。まさに今、咲き初めようとする黄薔薇のごとき少女であった。薄緑ががった金の巻き毛に縁取られた頬は白く、彼女がそつと微笑むたびに薔薇色に色づいた。伏し目がちな双眸は不思議な金の光沢を湛え、潤むようなまなざしは見る者すべての心をとろけさせる。桃色の唇から小鳥がさえずるような声が紡がれるたび、微かな息遣いすら聞き逃すまいとだれもが耳を澄ませた。清楚なドレスに隠された華奢な肢体、その甘い柔肌をどれほどの男たちが夜の夢に見たことだろう。

高嶺の花といえど未だ手折られることなく、悩ましげに匂うはだれも知らぬ蜜の香り……。この甘美な事實は公国中の若者を熱狂させ、伯爵家の屋敷には連日連夜、恋文と贈りものが山のように届けられた。

求婚者には貴族の子弟ばかりでなく、大商人の跡取り、地方の有力者の息子、はては国外からも我こそはと名乗りを上げる者もいた。

幸運の花婿に選ばれる殿方はさていかにと、公都ブランシェリウムの下町では賭事が流行る始末だった。やんごとなき殿上人から市井の民草まで、国中の人々が注目するなか——事件は起きた。

とある男爵の三男坊がフレデリケに恋い焦がれるあまり、夜這いをかけたのである。男性のみに権力が許されたこの時代、女性の貞節、特に未婚の乙女の純潔はとかく重要視された。たとえ一方的な暴力の末であつたとしても、一度肌を許してしまえば、それは女性側の落ち度とされた。淫売の烙印から逃れ、女の名譽を守る手段はただひとつ。

それは、清らかな花を散らした男との結婚だった。

たとえ婚前であつても、夫となる者との交わりであれば罪にはならない。つまり既成事実を作ってしまったえば、どんな身分の男でも意中の娘を手にするのできたのである。

貴族とは名ばかりの家柄に生まれ、家督すら継げぬ冷飯食いに残された、暴挙に等しい手段だった。しかし恋情に狂つた若者を止められるものがあるはずもなく、彼は一世一代の大勝負に挑んだ。

——結果をいえば、彼の失敗に終わった。

募る想いのあまり、末娘に不埒な真似をしでかす不屈き者の出現を伯爵夫妻は危ぶんでいた。次女の嫁ぎ先であるエンデル伯爵家に依頼し、警護の騎士たちを早々に借り受けていたのである。

夜陰に乗じて屋敷に忍びこむことには成功したものの、フレデリケの寝所に近づくことすら叶わぬうちに発見され、あえなく御用となった。

この出来事は瞬く間に公都を席卷し、人々を驚かせた。フレデリケの無事を喜びつつ、しかし哀れな青年に同情を寄せる者も少なくはなかった。『罪深きはその美しさ。嗚呼、君はなんと無慈悲なのだろう——』などという揶揄めいた恋歌が城下に流れ、いつまでも答えを出さぬフレデリケに苛立ちの声が上がりはじめていた。

そのひと月後、再びブランシェリウムの都に衝撃が走る。

フレデリケが、修道院に駆けこんだのだ。

女性が修道院に入るとはすなわち、髪を切り、神の花嫁たる修道女になることに他ならない。つまり彼女はすべての求婚を突っぱね、生涯未婚であることを宣言したのである。

これには求婚者ばかりでなく、フレデリケの両親や姉たちも多いに困惑した。

フレデリケが立てこもる修道院に通い詰め、なんとか説得を試みるものの、彼女はうんともすんと口を開かない。修道院側も簡単に受け入れるわけにもいかず、艶やかな金翠の髪はそのままであったが、それもまた時間の問題だった。

このままフレデリケは、本当に触れてはならぬ禁断の花になってしまうのか――。彼女に想いを寄せる男たちは悲嘆に暮れ、人々は美しすぎた令嬢の悲劇に心を痛めた。

それから更に、ひと月の時が流れた。

マーニヤはありふれた人生を歩んできた娘だった。

貧しい農家の次女に生まれ、両手の指でも数え足りないほどの弟妹に囲まれて育った。父は末の弟が生まれて間もなく流行り病に倒れ、あつけなく死んでしまった。未だ手のかかる幼子を何人も抱え、残された母は途方に暮れた。

家計を助けるために兄は公都まで出稼ぎに行き、姉は家事と内職をこなしながら弟妹たちの面倒を見た。母も必死に畑を耕したが、それでも育ち盛りの子どもたちを養っていくには厳しかった。

日に日に憔悴していく母や姉にマーニヤは訴えた。――あたしを売ってちょうだいと。

母は怒り、姉は泣いた。だが口減らしに娘や幼い子どもを売ることなど、マーニヤたちの周囲では決して珍しいことではなかった。そうしなければ生きていけないほどの現実が、故郷にはあった。

それでも母がだれひとり我が子を手放そうとしなかったのは、きつとマーニヤたちを愛していたからだ。マーニヤも家族を愛していたからこそ、その思いを裏切ると決めた。

気立てのいい姉には、いくつかの縁談があつた。そのうちのひとつは、姉が密かに想いを寄せる幼なじみからの求婚だった。彼は無口だがとても働き者で、マーニヤや弟妹たちのことも不器用ながらにかわいがってくれた。だから姉に身を売らせる真似など、決してさせたくなかった。

何日も何日も話し合い、ときには口論し、とうとうマーニヤは母と姉を説き伏せた。ただし身売りではなく、修道院に入るという条件つきで。

それではただ食い扶持が減るだけだと言うマーニヤに、母は頑として譲らなかつた。我が子を売った金で生き延びるくらいなら死んだほうがましだという脅しのような懇願に、マーニヤは頷くし

かなかった。

十四歳の春、マーニャは故郷の村をあとにした。

母も姉も泣いていた。いつもいたずらばかりしてマーニャを困らせていた二番目の弟も、マーニャがどこに行くのかも知らない三番目の妹も。見送りにきてくれた兄代わりの幼なじみはむっつりと黙りこみ、母の腕に抱かれた末の弟だけがあどけなく笑っていた。

さよならは言わなかった。ただ、元気でね——と。

マーニャは兄を頼って公都を目指した。たまたま公都に行商へ行くという気のいい商人の馬車に乗せてもらい、最初で最後の短い旅は穏やかに過ぎた。

公都で迎えてくれた兄は何も言わず、一度だけマーニャの頭を撫でた。修道院へ行く前にどこでも案内してやると言ってくれたが、マーニャは首を横に振った。小さい頃のように兄に手を引かれ、マーニャは公都で最も古い修道院の門を叩いた。

別れのとき、兄はマーニャを抱きしめ、声を立てずに泣いた。マーニャがはじめて見た、兄の涙だった。

マーニャを迎え入れてくれたのは、灰色のベールに白い髪を隠した老境の修道院長だった。彼女は気難しそうな細い目でじつくりとマーニャを見つめたあと、こう言った。

「あなたは年若く、この世の喜びというものを知らぬままここへやってきたように感じられます。ここは神への愛と祈りだけを胸に抱いて生きる場所。あなたはその心を、神に捧げることを誓えますか？」

マーニャは濃い鶯色の瞳を瞬かせ、素直に首を傾げた。

「わかりません。あたしは今まで神さまとは縁遠い場所にいたから、神さまがどんな人なのかよく知りません。愛せるかどうかなんて、その人を知らない限りだれにもわからないと思います」

「よろしい」

院長はひとつ頷き、思いがけず優しく微笑んだ。

「あなたはここで、心ゆくまで神を知る努力をなさい。そしてあな

たの神を得たとき、もう一度答えを聞きましょう」

「あたしの……神さま？」

「そうです。あなたが生涯の愛を捧げるにふさわしい、尊い存在を見出すのです」

こうして、マーニヤは見習い修道女となった。

正式な修道女になるためには、最低でも一年の修行を経なければならぬ。俗世への未練を断ち、信仰の道を歩めるのか——もっといえば、娯楽も贅沢も許されず、質素で変化のない修道院の生活になじめるかどうか見定める期間が必要なのだ。見習いの間は髪を切らず、身に纏うのは深い青のベールと尼僧服である。

青いベールの下、いつもどおり肩を覆うアーモンド色の髪を見たとき、マーニヤは知らず知らずのうちに張り詰めていた心がほっとゆるんだのを感じた。同時に、ほろりとこぼれた涙がひと粒、静かに頬を濡らした。

それはきつと、少女がようやく自分に許した「悲しい」という思いだった。

自分の境遇が特別でもなんでもないとをマーニヤは知っている。この世にありふれた、平凡な娘なのだと。

だから嘆く必要はない。憐れむ必要はない。

たったひと雫の涙が、マーニヤの最後のわがままだった。

喜ばしいことに、修道院での暮らしはマーニヤにとって苦ではなかった。自ら鋤を振るって畑を作ることとはもちろん、冷たい石壁に囲まれた部屋で寝起きすることも、味気ないパンとスープだけの食事にも、貧困のなかで育った村娘は慣れっこだった。

確かに娯楽はないに等しかったが、知識や教養を身につけることは奨励されていたので、修道院にはすばらしい書物がいくつもあった。マーニヤは院長や先輩の修道女たちに読み書きを教えてもらい、巨大な書庫の蔵書を片っ端から読み漁った。薄っぺらな紙の上に連なる文字の塊は、しかしマーニヤにどこまでも広く深い世界を見せてくれた。

朝と夕の祈りの時間には、家族の健康と幸福を願った。そのたびに思い浮かぶのは、微笑んで花婿に寄り添う美しい姉の晴れ姿だった。

静かな時の流れに身を浸していると、故郷に残してきた何もかもいつしか心から剥がれ落ちていくような気がした。すべてを失ったときこそ、マーニヤは迷いとともに髪を断ち切ることができるのだらう。

そうやって名もなき修道女のひとりになるのだと——ありふれた人生が続いていくのだと、思っていた。

聖ベルティアナ修道院は、公都ブランシェリウムで随一の歴史と伝統を誇る女子修道院である。

初代大公の妹姫であった聖ベルティアナによって開かれ、代々大公家に縁のある貴婦人が院長を務めている。そのため、この修道院で終生誓願を立てた修道女たちのなかには良家の令嬢や夫人であった者が数多くおり、聖ベルティアナ修道院は高貴な女性たちの駆けこみ寺としても有名だった。

その修道院の聖堂に、ひとりの少女の姿があった。天地の王アケロンと 暁の聖母 シェライーデ、そして 星の御使い ラキエルの聖像が安置された祭壇の前に跪き、両手を固く握り合わせてじつと俯いている。小柄な痩身を包むのは、見習い修道女であることを表す青色のベールと尼僧服。どこか幼さを残す横顔には深い苦悩が影を落とし、彼女をまるで嘆きの淵で祈りを捧げる聖女のように見せていた。

そう、少女は悩んでいた。切実なまでに悩んでいた。

「神さま、聖母さま、御使いさま……」

黒目がちな鷺色の瞳でするように祭壇を見上げ、少女は途方に暮れた声で問いかけた。

「あたしはいつたいどうしたらいいんでしょうか？」

しかし冷たい石像は何も答えてはくれず、静かなまなざしを少女に注ぐだけだった。

今すぐ奇跡が起きて、全知全能の神様がすべてを解決してくれればいいのに……。思い浮かんだ虚しい願望に、少女は項垂れてため息を落とした。

折れてしまいそうなその背中へ、不意に金の鈴を振るうような声が投げかけられた。

「——まあ、マーニヤったらこんなところにいらしたのね！」

思わず飛び上がった少女——マーニヤは、おそろおそろ背後を振り返った。

「ずっとあなたを探していたのよ。一緒にお昼を召し上がりましょうねって約束しましたのに」

そんな覚えなんてありませんっ！ とマーニヤは心のなかで絶叫したが、それを口にする勇氣はなかった。

青ざめて硬直したマーニヤの様子などがまわず、声の主はかわいらしく微笑みながら近づいてくる。その後ろで、唯一の出入り口である扉が大きな音を立てて閉まった。

「本当にあなたは意地悪でつれない方ですね。こんなにもわたくしが——」

祭壇上の薔薇窓から射しこむ七色の光が、その清艶な美貌を照らし出す。

金翠に煙る豊かな睫毛、その奥から見つめてくる蜂蜜色の瞳は背筋が震えるほど蠱惑的だ。肌は陶器のように白く滑らかで、だというのに笑みを浮かべる唇は濡れた果実よりも瑞々しくふっくらしている。マーニヤと同じ見習い修道女の装束を身につけているが、その細さは貧しさゆえのものではなく、洗練された美しさだった。

視線を逸らすことすらできないマーニヤの目の前までやってくると、絶世の麗人は身がかがめ、鼻先が触れるような距離でささやいた。

「仲良くしたいと言っているのに」

甘美なアルトに、マーニヤは心底怖気立った。

「フフ、フ、フレデリケさま……お、お顔が近いです」

「まあ、わたくしのことはリデルと呼んでくださいと何度も言っていますでしょう？」

「リ、リデルさま、あの、お願いですから離れて、くださ……」

「リデル、ですわ。それにそんな言葉遣いをされたら、わたくし悲しくて悲しくてせっかくのお願いも聞けませんわよ」

じりじりと迫ってくる美貌に祭壇の下まで追い詰められたマーニ

「ヤは、とうとう涙目になって叫んだ。」

「わかったからどいてええ、リデル——！」

「いいよ」

掌を返したようにフレデリケはあっさりと身を離した。マーニヤはぐったりと崩れ落ちる。

「本当に失礼だなあ、マーニヤは。ひと月も同じ部屋で暮らしてる相手の顔をまだ見慣れないなんて」

フレデリケはへたりこんだマーニヤの傍らに腰を下ろすと、慣れた仕種で胡座をかいた。スカートの裾が盛大にめくれたが、気に留めず踵になった膝の上に頬杖をつく。

「そ、そういうことは鏡を見てから言いなさいよ……！」

恨めしく睨んでやると、なぜかにつこりと笑みが返ってきた。

「褒め言葉だと思ってありがたくいただくよ」

「褒めてない！」

この見てくれだけは天使か女神かというような少年の名を、フレデリケ・エリ阿斯・グリーンヒルという。この国で知らぬ者などいない時の人、栄えあるグリーンヒル伯爵家の末娘——もとい、末息子である。

公国中の若者たちが焦がれてやまない麗しの伯爵令嬢が、実は男だったなどと……いったいだれが想像するだろう？

マーニヤは偶然にもこの事実を知ったとき、あまりの衝撃にめまいを覚えるどころか気を失ってしまった。夢から覚めると、骨の髄までとろけるような微笑を湛えたフレデリケが添い寝をしていたというこのほうが更におそろしかったが。

「——ところで、一時間も聖堂にこもって何をお祈りしてたんだい？」

ふと変わったフレデリケの声音に、マーニヤはぎくりと肩を強張らせた。

「何を、って……」

「ずいぶん深刻そうな様子だったね。『あたしはどうしたらいいん

でしょうか?』なんて言つてたし」

「聞いてたの!?!」

フレデリケはうつそりと金色の瞳を細め、マーニヤの顔を覗きこんだ。

「ねえマーニヤ、何か悩んでることがあるなら力になるよ。きみと僕の仲じゃないか」

「別に、悩みなんか……」

「それとも——まさか僕との『約束』を破る気でも起こしたわけじゃないよね?」

□元はこのうえなく優しく微笑んでいるのに、フレデリケのまなざしはマーニヤの心臓を氷漬けにした。

フレデリケの秘密を知っているのは、この修道院のなかで同室のマーニヤだけだ。それゆえ彼女はフレデリケの共犯者になることを脅され——もとい、約束させられていた。

マーニヤは壊れたからくり人形のようにがくがくと首を縦に振った。

「そっか……それならいいんだ」

ふっとフレデリケは表情をゆるめると、珊瑚色の爪が並んだ指先でマーニヤの頬に触れた。羽が掠めるような愛撫に、マーニヤの鼓動が激しく鳴り響く。

「それにかわいいマーニヤと離れ離れになるのは、とてもさびしいもの」

フレデリケはくすりと小さく笑って立ち上がった。ぼうつと顔を赤らめたマーニヤに手を差しのべる。

「そろそろ行かないと昼食抜きになっちゃうよ。今日の食事当番は□うるさいシスター・アデリラだから」

「そっ、そうね」

マーニヤは一瞬ためらい、おそろおそろフレデリケの手を取った。優しくマーニヤを立ち上がらせてくれる彼は、まるで紳士のようにだった。

「ああ、そうだ。きみの洗濯ものが乾いてたから取りこんでおいたよ」

「へ……?」

奇妙にどきどきしている胸に戸惑っていたマーニヤは、一瞬なんのことを言われたのかわからなかった。

確かに、洗った着替えや下着を朝食の前に干しておいたが——下着?

フレデリケは実に爽やかな笑顔でのたまった。

「マーニヤってば、ずいぶんかわいい下着を穿いてるんだね」

「……い、いやああ——っ!」

昼下がりの聖堂に、哀れな少女の悲鳴が響き渡った。

結局ふたりは昼食を食べ損ね、腹の虫を鳴らしながら午後の修行に励む羽目になるのだが、それはまた別の話である。

時は、まだ公都が雪のドレスを纏っていた黒の第二月（ゾルテ・アーノ）まで遡る。

その日、朝の祈りを終えたマーニヤは、朝食のあとに院長室まで来るよう呼び出しを受けていた。春に控えている正式な修道女になるための終生誓願についての話かと考えたが、先輩修道女たちは「違う違う」と訳知り顔で首を横に振った。

「きつと例のお方のことよ」

「今この修道院にいる見習い修道女はあなただけだもの。もうすぐ終生誓願を迎えるほどの経験者なら、新入りのお目付役にはぴったりでしょ？」

聖ベルティアナ修道院にグリーンヒル伯爵家の末の令嬢が供もつけずにやってきたのは、つい先日のことだった。公国中の若者を虜にした美姫の噂は修道女たちの間でも持ちきりだ。しかし当の令嬢は院長の許に隔離され、未だその美貌を拝した者はいない。彼女の存在を公にするということは、見習い修道女としての受け入れが決まったのだ。

先輩たちのなんとも厄介な予言に憂鬱になりながら、マーニヤは院長室の扉を叩いた。

「どうぞ、お入りなさい」

「失礼します」

厳格そうな院長の声に招かれるまま扉を開けると、仄かな花の芳香が鼻をくすぐった。

マーニヤは目を瞬かせた。

院長室は執務用の大きな書きもの机と椅子、整然と書物が並んだ書架ほどしか調度品のない、殺風景な部屋だった。院長は書きもの机に就いており、その前にひとりの少女が立っていた。

——その姿を認めた瞬間、まるで光り輝く花がふわりと咲いたよ

うだった。

ほっそりとした体を薄い青のドレスに包んだ少女は、目が合った瞬間、見たこともない金色の瞳をそっと細めて笑った。

ああ——あれは、故郷の朝焼けの空の色だ。

「シスター・マーニヤ、どうぞ入ってらっしゃい」

言葉を忘れて立ち尽くすマーニヤに、院長の静かな呼びかけが我を取り戻させた。

「あつ、す、すみません！」

慌てて部屋の中に入ったものの、少女のそばに行くことがひどく不謹慎なように感じられて、マーニヤは扉の前から進めなかった。

院長の眉間に険しい皺が寄ったが、叱責が飛ぶよりも早く少女が動いていた。

「シスター・マーニヤ？」

窺うような声音は、少女にしては低く、しかし澄みきっていた。

ドレスよりも濃い色のリボンで高く結い上げた金翠の髪が頬を撫で、マーニヤはすぐ目の前に少女がいることに息を呑んだ。

「はじめまして、わたくしはフレデリケ・エリアス・グリーンヒルと申します。あなたと同じ見習い修道女としてお世話になることになりました。……どうぞよろしくね、マーニヤ」

「あ、の……こ、こちらこそ、よろしく願います」

少女——フレデリケのどこまでも美しい微笑に、マーニヤは熱を出したように頬が火照っていくのを感じた。

立ち振舞いは楚々としていながら、フレデリケは匂い立つような色気を纏っていた。くらくらとめまいがするような艶やかさは、確かに国中の男たちが恋い焦がれずにはいられないはずだ。

「……あなたも噂は存じているでしょう。こちらのレディ・フレデリケは我が修道院に入ることを望まれ、見習いとして修行していたくことになりました。シスター・マーニヤは彼女と同室になって、ここでの暮らしを助けてあげなさい」

「えっ、あ、ど、同室ですか!？」

「何か問題でも？」

「いえ……」

修道女たちのほとんどはふたり部屋で寝起きしている。見習い修道女はマーニャだけだったため、今までひとりで部屋を使っていたが、そこに新しくフレデリケが入ることは妥当だろう。

しかし……こんな美少女と朝から晩まで過ごしていたら、心静かにしていられる自信などまったくない。

いやとはいえず、しかし快く歓迎することもできず、マーニャはももごと意味もなく口を動かした。すると、驚くほど白くすべらかな手に両手を包みこまれる。

「マーニャは、わたくしのことが嫌い？」

「う、えっ!？」

「わたくしの顔など見たくない？ わたくしはあなたのそばにいてはいけないのかしら」

「そっ、そんなことはっ」

「けれど、わたくしと同じ部屋で暮らすことはいやなのでしょう？」

「いやとかじゃなくて！ あ、あなたがすごくきれいだから、どうしようって」

しどろもどろになりながら必死に説明すると、フレデリケはひとつ瞬き、ふっ——と吐息のような笑みを洩らした。

「……あなたはともかわいらしい方ね、シスター・マーニャ」

いちだん低いささやきに、マーニャは思わず口をつぐんだ。

「わたくし、あなたのことが好きになれそう」

なぜだろう、笑みの色を深める黄金の瞳はとても美しいのに——まるで舌なめずりする獣の前に差し出されたようなおそろしさに、ぞくりと背筋が栗立った。

魅入られたように目を逸らせずにいると、「お話はまとまったようですね」という院長の声にハッと我に返る。

「シスター・マーニャは、レディ——シスター・フレデリケを部屋まで案内してあげなさい。用意ができたら聖堂のほうまで来るよう

に。そこで改めて皆にあなたのことを紹介いたします。よろしいですね、シスター・フレデリケ」

「はい、ありがとうございます。院長様^{マザー}」

フレデリケはにっこりと微笑み、院長に向かって優雅な一礼を返した。院長はしばしフレデリケを見つめていたが、どこか呆れたような口調で言った。

「あなたはシスター・マーニヤとはまた違った意味で素直な方のようにですが、あまり行きすぎた振舞いはしないように。特にシスター・マーニヤは、この修道院で最も修道女らしい修道女ですから」

いったい何を指しての忠告なのかマーニヤにはわからなかったが、フレデリケはくつと口端を持ち上げてみせた。

「……肝に銘じておきますわ」

院長室をあとにすると、どつと疲労感が押し寄せてきた。

深々とため息をつきたい思いを堪え、マーニヤはフレデリケに向き直った。

「それじゃあ、お部屋のほうにご案内します。新しい尼僧服はそこでお渡ししますね」

「ねえ、マーニヤ」

「……なんでしょうか、シスター・フレデリケ」

いつの間にか『シスター』が取れている呼びかけに、ひどくいやな予感を覚えた。

「わたくしのことはリデルと呼んでくださいな。家族や親しい方にはそう呼ばれていましたの」

「そ、それは駄目です。修道院の中では、お互いに『シスター』って呼び合うのが規則なんですから」

「ええ、ですからふたりっきりのときだけ。わたくしとあなただけの秘密ですわ」

唇に人差し指を当てていたずらっぽく笑うフレデリケに、マーニヤはふらりと倒れたくなった。

（やつぱりあたしには無理です、院長さま！）

泣きながら院長室に逃げ戻りたい心地で、それでも踏ん張って首を横に振る。

「それにあなたは貴族でしょう？ 平民の出のあたしには、とても恐れ多くてできません！」

すると、フレデリケはなんとも悲しげに目を伏せた。

「わたくし、修道院というのはとても平等な場所だと聞いていました。神の御許では生まれの貴賤などなく、だれもがひとりの人ではないと……それは間違いだっただけでしょうか？」

「そ、それは……そうですね」

「それに——わたくしは、あなたとお友達になりたいのです」

マーニヤはぱちぱちと目を瞬かせた。

「と、友達ですか？」

「ええ、そうですね。俗世を捨てる覚悟でここに参りましたけれど

……本当は、とても心細いのです」

憂いに濡れたフレデリケの言葉に、胸の奥にちくりと小さな痛みが走った。

いつの間にか忘れていた——だが今もどこに残る、幼い郷愁。

「同じ年頃の、同じく修道女を志す者として、お互いに支え合っていきたい。そう思っては……いけませんか？」

そつと両手を取られ、潤んだ瞳が雨のなかに打ち捨てられた仔犬のように見つめてくる。マーニヤは赤面しながらなんとか言葉を探した。

「い、いけなくなてないです！ でも、規則は守ってもらわないと困るから……」

「……マーニヤはとても真面目なのですね」

フレデリケは呟くような声で笑った。

「でも、わたくしとお友達にはなっていないだけなのですね？」

「その……あたしも仲良くなれたらいいなって、思います」

マーニヤとて人嫌いなわけではない。好意を示されれば嬉しいし、よりよい人間関係を築きたいと思っている。だが『友達』という響きがなんとも気恥ずかしくて、ぼそぼそと俯きがちに答えることしかできなかった。

「うふふ、マーニヤは本当にかわいらしいのね」

いったい自分のどこを気に入ったのかが、フレデリケは楽しそうな笑顔で「かわいい」を連発した。おかげで部屋に着く頃には、マーニヤはすっかり茹で上がって肩で息をしているようだった。

「フ、フレデリケさま、あたしで遊んでませんか！？」

「まあ、心外ですね。わたくしは正直な感想を口に出しているまででしてよ？」

嘘だ、絶対に嘘だ。わざとらしく目を瞞るフレデリケを、マーニヤは恨めしい気持ちで睨んだ。

見習い修道女の部屋は、修道女たちが暮らす僧坊の北の端に位置する。まるで独房のように狭く薄暗い室内には、中央に目隠し用の衝立が置かれ、壁の両側に簡素な寝台と衣装櫃がひとつずつあるだけだった。小さな明かり取りの下、聖家族を描いたタペストリーが慰めのようにひっそりと飾られている。

「ここが見習いの部屋です。一番暗くて寒い場所で暮らすことも、修道女になるための修行の一貫だつてされてます」

マーニヤは説明しながら、こっそりフレデリケの様子を窺った。広大な屋敷で美術品のような調度に囲まれて生活してきた令嬢に、はたしてこの光景は受け入れられるのか心配だった。

フレデリケはしばし無言で部屋の中を見回していたが、なんでもないような口調で訊いてきた。

「寝台がふたつありますけれど、わたくしはどちらを使えばよろしくて？」

「えっ……と、あの、右のほうを」

「わかりましたわ。着替えや荷物は衣装櫃にしまえばよろしいのかしら」

「あ、はい、身の回りのものはなるべくそこに収まるぐらいがいいと思います」

「まさしく『清貧たれ』ということですね」

余裕たつぷりに微笑むフレデリケに、マーニヤはほっと胸を撫で下ろした。

さっそくフレデリケに尼僧服を渡し、衝立の反対側で着替えてもらう。襟の詰まったドレスをひとりで脱ぐのは大変そうに思えたが、有無をいわさぬ笑顔で手伝いを断られてしまった。貴族の娘ならば使用人に身の回りのすべてを任せることが当然のはずだが、フレデリケはそうではなかったようだ。

「大きさは大丈夫ですか？」

「ええ、ぴったり。ドレスよりも動きやすいですわね」

衣擦れの音を聞きながら待っていると、頭髪を隠すベールを渡しそびれていたことに気づいた。マーニヤは慌てて衝立の向こうを覗いた。

「ごめんなさい、あたしつたらベールを……」

差し出したベールが、するりと床に落ちた。

フレデリケは豊かな巻き毛を下ろし、尼僧服に袖を通した格好のまま硬直していた。青色の胸元は大きくはだけ、その下のまぶしい素肌を隠すものは何もなかった。

——真っ平らだ。

マーニヤのそれも決して誇れるような大きさではないが、フレデリケの白い胸部は堅く、女の持つやわらかさやまろやかさというものを感じさせなかった。意外なほどしっかりとした鎖骨の線、ドレスの襟に覆われていた喉元に浮かぶあはれは……喉仏ではないだろうか？

マーニヤはぺたんと床に座りこんだ。

「え……あ……え、え？」

ぱくぱくと口を動かすことしかできずにいると、長く重いため息が聞こえた。

「まったく——僕としたことが、油断したよ」

フレデリケはそうぼやくと、気だるげに髪を掻き上げた。その瞬間、目の前の人物を包む空気がからりと変わった。

金色の瞳を眇める仕種はどこか鋭く、冷たい鋼に触れたようだった。無邪気で可憐な令嬢は消え、そこにいるのは、気位の高い猫を思わせる世にも美しい——少年だった。

「フレ、デリケ、さま？」

彼女、いや彼は……いったいだれだ？

少年は膝を折ると、瞬きすら忘れてしまったマーニヤの頬をゆっ

くりと撫でた。薄紅色の唇を妖しく歪め、吐息を吹きこむように彼女の耳元でささやく。

「まったくいけない子だね……マーニヤは」

——どんなお仕置きをしてあげようか？

痺れるような甘く冷たい声が、マーニヤの限界だった。

ぶつつりと糸が切れたように目の前が暗くなる。倒れかけた体をだれかの腕が抱き止めてくれた刹那、彼女は意識を失った。

これが平穩の終わりであり悩める受難のはじまりだと、マーニヤはまだ知る由もなかった。

フレデリケ・エリ阿斯・グリーンヒルは、グリーンヒル伯爵家に待望の男の子として生まれた。

伯爵夫妻はすでに三人の娘に恵まれていたが、長らく跡取りとなる息子を授かることが叶わなかった。当時、グリーンヒル伯爵ウィルバートは四十八歳、夫人のパミーラは四十二歳ともう若くはなく、第四子の妊娠はふたりにとって最後の希望だった。普段は温厚で沈着なウィルバートが男児誕生を知らされた瞬間、拳を突き上げて歓喜を叫んだことは今でも伯爵家の語り草になっている。

伯爵家の子どもたちは、かつて“奇跡の青い薔薇”と謳われたパミーラの美貌を見事に受け継いでいた。フレデリケと名づけられた末っ子も姉たちに負けず劣らず、天使が舞い降りたような愛らしい男の子にすくすくと育った。

両親である伯爵夫妻はもちろん、三人の姉も年の離れた唯一の弟を目に入れても痛くないほどかわいがった。

——しかし、彼女たちのフレデリケに対する情熱は、いささか……かなり間違った方向に開花してしまった。

「物心ついた頃には女の子の格好が当たり前になってたよ。姉上たちのおさがりなら山のようにあつたし、まあ着せ替え人形にはうつてつけだったんだらうね」

伯爵家の末娘として育つたいきさつを、フレデリケはなんでもなような口調で打ち明けた。

そのあまりの気負いのなさに、マーニヤは豆鉄砲を食らった鳩の気持ちがよくわかった。

「……ええつと？」

「つまりね、最初はお遊びに過ぎなかった女装が冗談でなくなるくらい似合ってたもんだから、気づいたらとんでもない評判になってたんだよ。姉上たちもハマり出したらとことん凝り性だから、徹底

的に僕を磨き上げてさ。僕もかわいいとかきれいとか褒められるのはいやじゃなかったから調子に乗っちゃったんだよねえ」

あははと他人事のように笑うフレデリケに、マーニヤはめまいと脱力感を覚えた。

あれから意識を取り戻した彼女を待っていたのは、「おはよう」とすばらしい笑顔で迎えてくれたフレデリケ（添い寝つき）という名の悪夢の続き……もとい、残酷な現実だった。再び天国へ魂を飛ばしそうになったマーニヤを、しかし彼はみすみす逃がしはしなかった。がっちりと肩を押さえこまれ、「僕の話聞いてくれるよね？」と背筋が凍るような美声でささやかれたら、蒼白になって首肯するしかない。

なぜか寝台の上で膝を突き合わせた状態で、フレデリケは語りはじめた。誉れ高き伯爵家の若君が性別を偽らねばならぬ理由——それは、「子どもの頃から女装を続けてたら、本当に女の子だっと思われるようになった」というものだった。

「お、お父さまやお母さまは止めなかったんですか？」

「母上は姉上たちと一緒に盛り上がったよ。父上は当然いい顔しなかったけど、あの人は母上の尻に敷かれっ放しだから」

今なお列国一の美女といわれる伯爵夫人は、なかなか気の強い女性らしい。並み居る恋敵を蹴散らし、口説きに口説いてパミーラを射止めたウィルバートは、愛妻と彼女によく似た娘たちには頭が上がりないようだった。

こうして止める者のいない『四人目の伯爵令嬢』の噂は公国中に広まり、フレデリケが年頃を迎えると数々の縁談が嵐のように舞いこんだ。

若く美しい未婚の姫君、更に大公殿下の覚えもめでたき名家の秘蔵っ子ともなれば、だれもが望む良縁である。途切れることのない求婚者の列に、しかし伯爵家は大いに慌てた。

何しろ、当のフレデリケはれっきとした男なのだ。どれほど少女の姿をしていようと、彼は伯爵家の跡取りであり、嫁ぐのではなく

妻を娶らねばならない立場なのだから。

「訂正しようにも信じる人なんてだれもないし、本当のことが知られたら知られたで醜聞になるのは間違いないだろ？ どうしようか手をこまねいているうちに、とうとう夜這いをかけられちゃって」「あの……さる男爵家の若君がつていう？」

「そうそう。これは本格的にまずいつてことになって、見かねた一番上の姉上がご夫君の大公殿下に相談したんだよ」

大公殿下をはじめとするごく一部の人々は、フレデリケの本来の性別を知っている。たいへんな愛妻家で知られる大公殿下は、弟の将来を憂えるマリアーヌの頼みに、ほとぼりが冷めるまで大公家縁の女子修道院にフレデリケを匿うことを提案した。

「男子禁制の修道院なら下心のある連中は近づけないし、何より修道女になるっていえばあきらめも早くつくだろうしね」

「このことを、院長さまは知ってるんですか？」

「知ってたら僕を受け入れると思う？」

逆に問い返されたマーニヤは、ふるふると首を横に振った。現在の院長であるマザー・アンゼリーネは大公殿下の伯母君に当たるそうだが、すでに家名を捨てた聖職者だ。厳格で敬虔な院長が俗世の出来事のために修道院の規律を破るとは思えない。

「だから修道院でこの秘密を知ってるのは……マーニヤ、きみだけなんだよ」

不意に変わったフレデリケの声色に、マーニヤはぎくりと肩を強張らせた。

「まさかこんなにあっけなくバレちゃうなんて……本当に困ったなあ」

フレデリケは小首を傾げ、気だるげに微笑んだ。悩ましいほど美しい笑みのなか、しかし金色の双眸は少しも笑っていない。

「もしも事が明るみになったら、我が家だけじゃなくて大公殿下にもご迷惑がおかけすることになるんだ。せつかくの殿下のはからいを無駄にするなんて……できると思っかい？」

「で、でも、嘘はよくないと思います」

精いっぱいの勇気を振り絞って反論すると、フレデリケはくつりと喉を鳴らした。

「なるほどね——確かに、きみは修道女らしい修道女だ」

とん、と軽く肩を押されただけで、マーニヤの視界はくるりと反転した。

「え……？」

目を白黒させていると、フレデリケが覆い被さるように顔を近づけてきた。ぎしり、と不吉に寝台が軋む。

「僕だって世間を欺くのは心苦しいよ、マーニヤ。でも神様は、たった一時の嘘すら見逃してくれないのかい？」

「フ、フレデリケさま！？ どいてくださいっ」

「きみが『うん』って言うてくれたら」

フレデリケはひどく静かなまなざしで見下ろしてくる。

「きみが神様の代わりに許してくれたら、どいてあげる」

「そんな、あたしなんて、ただの見習い修道女しかありません！」

「でも——僕の懺悔を聞いてくれるのは、きみだけだ」

マーニヤは思わず瞬いた。

少年の白い顔からは表情が抜け落ち、彼の胸の内を推し量ることは難しかった。だが、じっと外されぬ視線が、まるですがっているように思えた。

出会ったばかりのマーニヤには何もわからない。だが、唐突に思いつく——心細いのです、という言葉。

「……………あたしは、何をすればいいんですか？」

気がつく、そんな問いを口にしていた。

フレデリケは小さく目を瞠り、ふっと口元をゆるめた。

「マーニヤは優しいね」

やわらかな、まるで淡雪のような笑みに、胸の奥がきゅうつと痛んだ。

「僕がここを去るまで秘密を守ってほしい。ただ、それだけだよ」

「それ……だけ？」

「うん。きみが秘密を守ってくれたら、僕も必ず嘘を告白する」
マーニヤは大きく息を吸いこみ——頷いた。

「約束です。神さまに誓って」

フレデリケは、嬉しそうに笑ってみせた。

「約束だよ」

しかし、彼はいつこうにマーニヤの上から退こうとしない。それどころか、いたずらっぽく瞳を輝かせながら頬を撫でてきた。

「あの、フレデリケさま？」

「うん？」

「約束したから、そろそろどいてくれませんか？」

マーニヤの懇願に、フレデリケはうつとりと目を細めた。

「今更気づいたんだけど」

「はい？」

「……修道女を組み敷くなんて、なかなか倒錯的でそそると思わない？」

「……っ！？」

耳元に投下された爆弾発言に、マーニヤは声にならない悲鳴を上げた。

しかし、それを聞き届ける者は、だれもいなかった。

そして時は再び現在に戻る。

季節は移ろい、冬の最後の月である黒の第三月（ゾルテ・スーリ）も終わろうとしていた。すっかり雪もまばらな中庭を窓の向こうに見やり、マーニヤはため息をこぼさずにはいらなかった。

このひと月を振り返ると、凄まじい羞恥に身悶えそうになる。初日ですっかり味を占めたフレデリケは、暇さえあればマーニヤをからかうことに精を出し、彼女の反応を見て大いに楽しんでいた。まるで遊び盛りの仔猫の手中で転がされる鞠になったような気分だ。

甘いささやきや刺激的すぎる触れ合いに、いったい何度心臓が壊されかけたことだろうか。フレデリケと出会ってから、自分の寿命はおそろしく削られているに違いない。

彼は、まるで蜜のように甘美な毒だ。

美しい花には棘があるというが、フレデリケがその微笑みの下に秘めているのは芳しい毒だ。魂まで蝕まれ、身を滅ぼされるとわかっていても、心惹かれずにはいられない魔性の猛毒――。

「シスター・マーニヤ？」

淡々として呼びかけに、マーニヤはハッと我に返った。

傾きはじめて午後の陽が射しこむ書庫で、マーニヤは先輩修道女のひとりから勉強を教わっている最中だった。いくつもの書架が迷路を作り上げている書庫の奥には、長い机が並んだ閲覧室がある。ふたりはその一角で、広げた教本や筆記帳を挟んで向かい合っていた。

ちなみに、フレデリケは院長に呼び出されて席を外している。

「何か気になることでも？」

「いつ、いいえ、すみません！ シスター・リュシア」

慌てるマーニヤに長い睫毛を瞬かせたのは、明るい亜麻色の断髪を紫紺のベールで覆った女性だった。

年の頃は二十代後半、水鳥のようにほっそりとした首をわずかに傾げる様がなんとも優美だ。切れ長な双眸は、香り高い紅茶の色と揺るぎない静けさを湛えている。

シスター・リュシアは、年若いながらも二十年近くこの修道院で過ごしてきたという古株の修道女だ。院長からの信頼も篤い模範的な存在であり、マーニヤも修道院に入っただばかりのときから何かと面倒を見てもらっていた。

「珍しいですね、あなたが講義中によそ見をするなんて」

「すみません、ちょっとぼうつとしちゃいました……」

「いいですよ。——ちょうど切りのいいところでしたから、少し休憩しましょうか」

そう言うと、シスター・リュシアは教本を閉じた。

「悩み事ですか？」

「えっ？」

「ずいぶん塞いでおられるようですから。何か、悩んでいらっしゃるではありませんか？」

修道女の静謐なまなざしは、まるで心の奥底まで見通すように見つめてくる。

「悩んでいる、っていうか……」

「……シスター・フレデリケとのことですか？」

マーニヤは椅子から飛び上がった。

「彼女とうまくいっていないのですか？」

「そ、そんなことは」

「ありません、と言い切ることができず、思わず項垂れる。シスター・リュシアはわずかに目を細めた。

「シスター・フレデリケはたいへん美しく聡明な方ですが、少々奔放で型破りなところがあるようです。最近、シスター・アデリラは彼女のことばかり小言をこぼしていますもの」

「はあ……その、院長さまはあたしとは違った意味で自分に素直な人だって言っていました」

「……なるほど」

表情が薄い修道女の口元が苦笑気味に綻んだ。どうやらシスター・リュシアには、院長の言葉に含まれた意味がわかったらしい。

「確かにそのとおりですね。あの方はご自分を偽る必要などまったくないでしょう」

なんて羨ましい、と彼女はひっそりと呟いた。

マーニヤは鶯色の瞳を瞬かせた。

——ああ、フレデリケが最初から偽りのなかで生きているのだと、本当にだれも知らないのだ。

自分の懺悔を聞いてくれるのはマーニヤだけだと、彼は言っていた。嘘をつき続けることを、神様の代わりに許してほしいと。

フレデリケの真実を知っているのは、マーニヤだけだから。

「シスター・フレデリケは、あなたをとて慕っていらっしゃるようですね」

「え？」

「あなたと一緒にいらっしゃるときの彼女は、まるで好きな女の子にちよつかいをかける男の子のようですもの」

やんわりと微笑むシスター・リュシアの指摘に、マーニヤは火が点いたように赤面した。

……甘えられている、のだろうか。

もしもそうだとしたら——いやではないと感じている自分に気づき、ますます顔が熱くなる。

「……友達になってほしいって言ってくれたんです」

蚊が鳴くような声でマーニヤは打ち明けた。

「あたし、修道院に来て、もうそんな人はできないって思ってた。院長さまやシスターたちはよくしてくれるけど……故郷にいた頃みたいな、対等で、なんでもない悩みでも言い合える友達はいないだろうって」

だから、と続けた言葉は、知らず震えていた。

「すぐく……すぐく、嬉しかったんです」

差しのべられた手に救われたのは、きっとマーニャも同じだ。

何もかもあきらめていたはずの日々のなか、もう一度だけ神様が許してくれたわがまま。マーニャだけの、友達。

「……あなたにとっても、シスター・フレデリケはかけがえのない方なのですね」

シスター・リュシアの優しい声に、マーニャはなぜか泣きたい気持ちで頷いた。

「——はい」

修道院の一日は、日没とともに終わる。

夜の訪れを告げる鐘の音が公都に響く頃、聖堂に集まった修道女たちは一日の平穏と恵みを神に感謝し、祈りを捧げる。揃って夕食を摂ったあとは、早々に各自の部屋へ引き上げるよう暗黙のうちに決められていた。再び太陽が目覚めれば、慌ただしく彼女たちの朝がやってくるからだ。

僧房の北の端に位置する見習い修道女の部屋からは、すでに灯が消えていた。明かり取りから射しこむ月影が青白く室内を照らしている。

薄い毛布にくるまったマーニャは、隙間から忍びこんでくる夜気に身を震わせた。春が近いとはいえ、夜は未だ冷える。手足の末端から凍りついていくようで、毛布の中でぎゅっと縮こまった。

まだ故郷にいた頃、こんな冬の夜はきょうだいたちと身を寄せ合って眠ったものだ。ひとつの毛布を分かち合い、小さな弟妹たちを抱きしめて、あるいは兄や姉に抱きしめられながら北風のすすり泣く声をじつと聞いていた。

二度と触れることのないぬくもりが甦り、寒さがいつそうひどくなった気がした。恋しさはやがてきりきりと胸を締めつける痛みに変わる。

脳裏に浮かぶのは、美しい故郷の春だった。明るく澄み渡った空、やわらかな翡翠色に染まった野山。木々の枝先で丸々と膨らんだ蕾がいつせいに弾けると、村は花の帳に覆われる。

チェリーアプリコット

桜、杏、李……白い花びらが降り注ぐ道を、婚礼の衣裳を纏った姉が夫になる青年に手を引かれて歩いてくる。まるでふたりの門出を祝福するような花吹雪に、花嫁と花婿は幸せそうに微笑み合っている。そして――。

「……マーニャ？」

衝立越しの呼びかけに、マーニヤはハッと息を呑んだ。

「ど、どうしたの？」

「まだ起きているかと思って……」

寝返りを打ったのか、微かに寝台が軋む音が聞こえてくる。衝立の向こうにフレデリケがいることを思い出し、体からほっと力が抜けた。

「今夜は特に冷えるね。手足が氷漬けになりそうだ」

「まだ黒の季節（ゾルテ・フィース）だもの。青の季節（アスル・フィース）がはじまれば、すぐあたたかくなるわ」

一年は十二の月から成り、それを更に四つの季節に分けている。

青葉が茂る春は青の季節、太陽が燃え盛る夏は赤の季節（ロセ・フィース）、乾いた風が吹く秋は白の季節（フィア・フィース）、そして暗闇に凍える冬は黒の季節——というように。冬が終わり、
ヴェレンティア青の第一月（アスル・イール）の一日から七日間を渡って盛大に行われる迎春祭を経て、新たな一年がはじまるのだ。

迎春祭が過ぎれば、マーニヤは『最低でも一年』という見習い期間を終える。正式に修道女として髪を切る許しは、すでにマザー・アンゼリーネから貰っていた。

「これから迎春祭の準備で忙しくなるし、青の第一月まであつという間よ」

マーニヤは自分に言い聞かせるに応えた。そうだ。すぐに春はやってきて、今度こそ胸の奥に眠る想いと決別するのだ——。

一瞬、奇妙な沈黙が落ちる。フレデリケはため息をつくように呟いた。

「……そうだね。そうかもしれない」

その声がひどくさびしげに聞こえ、マーニヤは口をつぐんだ。

ぎしり、と反対側の寝台が鳴る。孤独を掻き立てるような寒さに彼も眠れないのだろうか。

「ねえマーニヤ、あのシスターとどんな話をしてたんだい？」

「えっ」

「昼間、閲覧室で話しこんでただろう？ シスター・リュシア、だっけ」

いつの間に見られていたのだろう。シスター・リュシアとの会話を思い出し、かあつと頬が熱くなった。

「何を……って」

まるで好きな女の子にちよつかいをかける男の子のようだとか、あなたにとってかけがえのない方なのですねとか、思い返せば転げ回りたくなるような指摘ばかりだ。マーニヤは毛布に潜りこんで身悶えた。

「ななな、何も！ ぜんぜん大したことなんて話してないわ！」

「……まったくそういう風に聞こえないんだけど」

「リデルが気にすることじゃないわ！ ええ、ちつとも、本当になんでもないから！」

むしろお願いだから何も訊かないで！ と涙目になりながら念じていると、ふとフレデリケの声が低くなった。

「僕には言えないようなことなのかい？」

ぎくり、と反射的に体が固まった。

衝立の向こうでひと際大きく寝台が軋んだ。微かな衣擦れのあと、ぺたぺたと乾いた足音が近づいてくる。

「シスター・リュシアには言えるのに、僕には何も話してくれないんだ？」

ぎいっと音を立てて沈んだのは、マーニヤの寝台だった。すぐそばに腰かけたフレデリケの気配が毛布越しに迫ってくる。

心臓が口から飛び出してしまいそうで、とっさに両手で口元を覆った。

「……………僕じゃ、なんの力にもなれないのかい？」

尋ねる声は怒っているようにも、拗ねているようにも思えた。

マーニヤは瞬くと、おそろおそろ毛布から頭を覗かせた。視界をフレデリケの形をした影が遮り、月明かりを灯した金色の双眸がじつと見下ろしてくる。

ああ、きれいだなと、マーニヤは状況も忘れて不思議な光に見られた。

「……本当に、なんでもないの」

その輝きに惹かれるまま、マーニヤはおずおずと打ち明けた。

「シスター・リュシアは修道院に入った頃からいろいろな面倒を見てくれた人で……あたしがあなたと、その、うまくいつてないんじゃないかって心配してくれたのよ」

「……ふーん」

いちだんと冷やかなフレデリケの声音に、慌てて釈明する。

「も、もちろんそんなことないって言ったわよ？ あなたとはぜんぜん性格も違うけど、一緒にいていやなわけじゃないし、それに――」

――かけがえのない人。

シスター・リュシアの言葉がずっと胸の真ん中に収まった。

ああ、そうか――フレデリケと過ごしたこのひと月を、本当は楽しいと感じていたのだ。大切な、特別な時間だと。

知らず、マーニヤは微笑んでいた。

「それに……あたしはリデルを、大事な友達だと思ってるから」
フレデリケの目が大きく見開かれた。

しばらくの間、ふたりは黙って見つめ合った。先に視線を逸らしたのは――フレデリケだった。

「僕は、きみの……『友達』なんだ？」

「リデルが友達になりたいって言うてくれて、あたし、嬉しかったの」

マーニヤは万感の思いをこめて言ったが、フレデリケの横顔は……なぜか切なさだった。

「……きみが喜んでくれたら、僕も嬉しいよ」

ごまかすように小さく笑ったかと思うと、少年は不意に身をかがめた。前髪越しに、まるで羽が掠めるような感触が額へ落ちる。

硬直するマーニヤに、立ち上がったフレデリケは優しくささやい

た。

「おやすみ、マーニャ」

彼が衝立の奥に去つても、マーニャはしばらく動けなかった。額を押さえ、いったい何をされたのかと必死で考える。

フレデリケの顔が近づいて、その形のいい唇が――。

「……っ!？」

マーニャは言葉にならない悲鳴を上げた。

見習い修道女たちの眠れぬ夜は、まだまだ続く。

水路を白く覆っていた薄氷が溶け出す頃、公都は年の瀬の慌ただしさに包まれていた。

磨いたような白壁の家々が整然と連なるブランシェリウムの街並は、白亜の都の呼び名にふさわしい古きよき大帝国時代の面影を漂わせている。いつそう真白く染まった冬の都は厳かな静寂を纏い、侵しがたい聖女を思わせる。だがひとたび祭の季節を迎えれば、まるで恋を知ったばかりの少女のように華やぐのだ。

家々の軒先では、春を表す青色の地に陽光の黄金で喜びと祈りの詞を縫い取った垂れ布が鮮やかに翻る。街のあちこちに飾られた薄黄色の花は、春女神の先触れとされる桜草^{プリムローズ}だ。迎春祭の開幕を告げるパレードでは、春の精霊に扮した娘たちが大きな花車の上から桜草の花を振りまいて人々に祝福を授けるのだという。

軽やかな音色と歓声のなか、花の雨が降り注ぐ光景はどれほど心躍るものだろうか。だが、どんなに街路の石畳に敷き詰められた薄黄色の絨毯を想像しても、結局目にするここのない虚しさが残るだけだ。

聖ベルティアナ修道院では、大晦日の晩に一般参加が許されたミサが開かれる。年が明けた早朝には院内の庭で炊き出しが行われ、参拝者や貧困層の人々にあたたかいパンやスープ、甘い果実などが振る舞われる。修道女たちは仕事に追われ、祭を楽しむ暇など微塵もない。

下っ端の見習いであるマーニヤはその筆頭で、祭を一週間後に控えた今からコマネズミのように走り回っていた。今日も、炊き出し用の材料を注文してくるようにおつかいを申しつけられたところである。

薄曇りの空の下、街はすっかり祭の雰囲気^{雰囲気}に包まれていた。行き交う人々はどこかそわそわしていて、笑い出すのを我慢している子

どのような表情を滲ませている。春めいた明るい色合いの装いをちらほらと見受ける一方、深い青の尼僧服にくすんだ灰色のケープを重ねたマーニヤの格好はやけに人目を引いた。

見習いとはいえ修道女が市井を歩くことなど滅多にない。おまけに、公都中の話題をさらったグリーンヒル伯爵令嬢の出家騒動が世間の記憶に強く焼きついており、マーニヤは不躰なまでの好奇の視線に追い回される羽目になった。

（シスター・リュシアが仰っていた『充分気をつけるように』ってこのことだったんだわ……！）

出かける間際、先輩修道女が柳眉をわずかにひそめていた理由を思い知ったマーニヤは泣きたくなった。最近ではすっかり行動をともにするようになったフレデリケは、早々に別の仕事を命じられていた。身を隠している張本人がこの姿を見せるわけにはいかなからだろう。

マーニヤは肩を縮ませて足早に大通りを抜けると、人気の少ない路地を選んで逃げこんだ。

ブランシェリウムは中央を貫く中大路なかおおじによって東西に分かれている。公都の最東端に大公家の方々がおわします宮城があり、それを囲むように各政庁や上流貴族の邸宅が集まっている。対する西区は庶民の街で、洗練された東区に比べるとごちゃごちゃと路地が入り組んで雑然としていた。

聖ベルティアナ修道院は東区の外れにあり、注文先の商店には中大路を渡って西区の中へ入らなければならない。シスター・リュシアに描いてもらった地図を頼りに、マーニヤはおもちゃの迷路のような裏町を進んだ。

（ええつと、さっきあのお店の角から西区に入ったから……まっすぐ行って、六番目の十字路を右に曲がればいいのかしら？）

土地勘のないマーニヤにもわかりやすいよう、地図には丁寧な説明が添えられていた。これなら迷わずに済みそうだと安心した矢先、「ねえ！」と若い男の声が背中当たった。

思わず飛び上がりそうになって振り返ると、あまり上等とはいえない身形をしたふたりの若者が立っていた。ちょうど少年と青年の狭間に差しかかった年頃で、まくり上げたシャツの袖から伸びる腕はいかにも労働者らしくたくましい。

「うわ、本物の修道女だ。はじめて見た」

「どこ行くの？ よかったら俺たちが案内してあげようか」

マーニヤはサツと青ざめた。彼らの日に焼けた顔に浮かんだ表情は、子どもの頃に散々泣かされたガキ大将の意地悪い笑みによく似ていた。

「け、結構です。道はわかってますから……」

「そんなつれないこと言わないでさあ、少しくらいつき合ってよ」
若者たちは大柄な体躯で威圧するようにじりじりと迫ってくる。

気づけば民家の壁際まで追い詰められ、マーニヤは身を震わせた。

昔から暴力的な異性が苦手だった。野育ちの少年というものはたちの悪い腕白ばかりで、気の弱いマーニヤは格好のいじめの標的だった。兄や年上の幼なじみが守ってくれたが、その庇護が却って同世代の少年たちと疎遠になる原因になってしまったらしい。

思えば、男の子だとわかっていて気を許すことができた相手はフレデリケがはじめてだ。ある意味心臓に悪い人物だが、彼が自分を傷つけるような振舞いをするはずがないと漠然と理解している。

（もしも、ここにリデルがいてくれたら……）

きつと嫣然とした笑みを浮かべ、ネズミを転がす猫のようにあっさりと彼らを退けるに違いない。マーニヤは胸の前で固く両手を握りしめ、つつかえそうになる声で必死に訴えた。

「あ、あの、あたし急いでるんです。そ、そこをどいてください」
しかし、若者たちはいつそうにやにやと笑うだけだった。

「そんなに怖がらないでよ」

「そうそう。ここらへんはたちの悪いやつがうろつろしてるから、俺たちが守ってあげるよ」

いったいどの口が言うのかと罵倒してやりたい。不意に伸ばされ

た男の手が無遠慮に肩を掴み、声にならない悲鳴に喉の奥が痙攣する。

「じゃあ行こうか」

マーニヤはきつく目を瞑った。

（リデル、リデル……！）

そのまま引きずられていきそうになった瞬間、第三者の音が鋭く斬りこんできた。

「——おい、そこで何をしている！」

途端に肩を解放され、マーニヤはハツと目を見開いた。うろたえている若者たちの向こうで深緑のサーコートが翻る。

険しいまなざしで若者たちを睨んでいるのは、彼らと同じ年頃の青年だった。しかし、中背ながらも引き締まった体躯を包んでいるのはサーコートと同色の騎士服であり、白い手袋をはめた手は腰に帯びた長剣の柄頭を押さええている。騎士服の胸元に刺繍された紋章を目にしたマーニヤは、息を呑んだ。

（吠え猛る双頭の白獅子……大公家の紋章？）

深緑の騎士服は宮廷騎士団に所属する者だけが袖を通すことが許されたものだと聞いたことがある。つまり、目の前の青年は大公殿下に忠義の剣を捧げた本物の騎士なのだ。

「白昼堂々、騎士の目前でいやがるご婦人を力づくで連れ去ろうとするとはいい度胸だな。おまけに触れざるべき神の花嫁相手とは」

青年は明るい碧の双眸を眇め、獰猛に笑った。彼が一步踏み出しただけで、若者たちは天敵を前にしたカエルのように竦み上がった。

「こ、これは騎士の旦那、何か勘違いされちゃいませんか」

「俺たちは、ただこの娘……いや、こちらのシスターがお困りのようだったから声をかけただけですよ？」

引きつった笑顔で弁解するふたりに、青年は更に口角を吊り上げてみせるだけだった。だが彼らには充分すぎたようで、「し、失礼しました！」と情けない声で叫ぶと転がるように逃げ去った。

なんともあつけない退散に、マーニヤはへなへなとその場に座り

こ
ん
だ。

「シスター、どこかにお怪我を？」

青年は優雅に片膝を折ると、研ぎ澄まされた殺気が嘘のようにやわらかい口調で尋ねてきた。

「い、いえ、大丈夫です。あ、安心したら力が抜けちゃって……」

答えているうちにじわじわと羞恥がこみ上げてくる。赤面して俯いたマーニャに青年は恭しく手を差しのべた。

「お手をどうぞ」

「あつ、ありがとうございます」

おそろおそろ青年の手を取ると、彼は淑女をダンスに誘うように立ち上がらせてくれた。マーニャの顔はますます熱を増した。

間近で見ると、青年は思いがけず少年らしさの残る顔立ちをしていた。短く整えた赤錆色の髪にきつい目元、しかし微笑んだ顔は温厚さと快活さを併せ持つ好ましいものだった。

「さぞ怖い思いをなされたでしょう。このあたりは東区寄りとはいえ、たまにあのような輩がうろついているのです。あなたのような修道女様がおひとりでお歩きになるには、いささか不用心かと」

「すみません……あの、助けてくださって本当にありがとうございます……ました！」

慌てて頭を下げると、青年は「騎士として当然のことをしたまでです」と穏やかに答えた。

（なんていい人なんだろう）

本物の騎士に出会ったのはじめてだが、彼はまるで物語に出てくる理想の騎士そのものだ。正義と礼節を重んじ、か弱い女性を守る頼もしい存在。マーニャはすっかり感動してしまった。

「ところで、どこかへお出かけの途中とお見受けしますが……」

「はい、おつか……ええっと、迎春祭の準備で注文に」

そのまま『おつかい』と答えると小さな子どものように、それら

しく言い直す。青年は思案するようにゆっくり瞬いた。

「それでは、僭越ながら私をご案内いたしましょう」

「……えっ!？」

マーニヤはぎよつと目を剥いた。

「先ほども申し上げたとおり、東区は深窓の佳人たる修道女様がひとり歩きをなさるには少々難がございます。祭も近いこの時期、浮かれて無礼をはたらく者もおります」

青年の意見は尤もだ。しかし、おそらく職務中である彼をたかだか見習い修道女の護衛を押しつけるのは申し訳ない。

「あの、でも、お仕事の途中なんじゃ……」

「ご心配なさらず、すでに所用は済ませてあります。それにお困りになっていらつしやるご婦人を捨て置いて宮城へ戻つては、我が君からお叱りを受けてしまいます」

「我が君……つて?」

「ああ、我が主君であらせられる大公殿下にございます。そういえば、私としたことが名乗り上げることを失念しておりました」

青年は堂に入った騎士の礼を見せた。

「たいへん失礼いたしました。近衛騎士隊第二小隊所属、グリフィス・ロイー・エンデルと申します」

（近衛騎士隊つて……大公家直属の精鋭部隊!？）

近衛騎士といえば騎士のなかの騎士、大公家の方々の身边警護を任された選りすぐりの強者だ。そしてエンデルという家名が聞き間違えでなければ、おそらくファルスの霜剣と名高いエンデル伯爵家の出身ということになる。

建国の頃より君主たるファルス家に忠誠を誓い、その類い希なる剣の才を以て公国の危機を退けてきた騎士の一族。二十年前の内乱の折にも、現大公シュトール殿下のよき助けになったという。

（確か、リデルの二番目のお姉さまが今の伯爵さまにお輿入れなさったって聞いたけど……）

ということは、目の前の青年——グリフィスは血のつながりはな

いがフレデリケの親戚に当たる。それがわかるとわずかに親近感を覚えた。

「あの、あたしは聖ベルティアナ修道院の見習い修道女でマーニヤといえます。お言葉に甘えて案内してもらってもいいですか？」

ためらいがちなマーニヤの問いに、しかしグリフィスは驚きの表情を浮かべた。

「聖ベルティアナ修道院——ですか？」

「え？ あ、はい。そうですね……」

「……失礼ですが、シスター・マーニヤはグリーンヒル伯爵令嬢をご存じですか？」

注意深い猫のような目がじつと覗きこんでくる。一瞬、冷たく張り詰めた空気がマーニヤの首筋を舐めた。

「し、知ってます、けど」

震えそうになりながら答えると、グリフィスは双眸を細めた。永遠のような沈黙のあと、不意に微笑んでみせる。

「そうですか——彼女は変わりありませんか？」

心臓が狂ったように踊っている。マーニヤは呼吸を整えながら、なんとか平静を装った。

「……はい、とても。騎士さまは、リデ……シスター・フレデリケの……ええっと、お友達なんですか？」

歳の近い親戚の同性との関係をなんと言い表せばいいのだろう。グリフィスは目を丸くすると、ぷつと噴き出した。

「私とフレデリケ嬢が『お友達』、ですか」

「あ、あの、違いましたか？」

「いえ……あながち外れでもないかもしれませんが。私の兄に彼女の姉君が嫁いでこられたのですが、もともとフレデリケ嬢とは幼なじみなんですよ。子どもの頃はよく一緒に走り回ったものです」

彼はしみじみとした口調で語った。

「彼女ときたら外見は人形のようになくせに、中身はたちの悪いいたずら好きで……何度尻拭いをする羽目になったことか」

「……わかるような気がします」

さぞ愛らしく手のかかる『お転婆』だったに違いない小さなフレデリケを思い浮かべ、マーニヤは大きく頷いた。

しかし、幼なじみということはフレデリケの本来の性別を知っているのだろうか。大公殿下をはじめ、一部の近い人間は秘密を知っているとフレデリケは言っていたが、グリフィスがその範疇に入るのかどうかはわからない。

思わずまじまじと凝視していると、グリフィスはふっと笑みの色を深めた。

「フレデリケ嬢はなかなか個性的な人物ですから修道院でうまくやっていけるのか心配していたのですが……どうやら、杞憂で済んだようです」

「え？」

「いえ、あなたを見ているとなんだかそう思えて」

いったいどういう意味を含んでいるのか、彼の言葉にマーニヤは疑問符を浮かべることしかできない。

グリフィスは「ところで」と話題を変えた。

「実は、シスターに折り入ってお願いしたいことがあるんですが……」

「……あたしに、ですか？」

きょとんとするマーニヤに、若き騎士は大仰に頷いてみせた。

「ええ、フレデリケ嬢に届けていただきたいのです。——私からの『恋文』を」

内緒話をするようにささやく表情は、まさにいたずらを持ちかける悪童そのものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4752s/>

シスター！

2011年11月17日03時25分発行